

小室直樹著「人にはなぜ教育が必要なのか」総合法令 1997年11月25日刊を読む

1. 「二宮金次郎」を目指した戦前の教育理念

- (1) 戦前、戦中の教育を受けた人で、二宮金次郎を知らない人はありますまい。手本は二宮金次郎！ どの小学校にも、この人の銅像が立っていました。この人の言行は、くり返し教えられ、歌にもなりました。
- (2) 二宮金次郎の「徳行」を簡単に言いますと、「節制」「節約」「勤勉」「正直」「誠実」「正義」「中庸」「純潔」「謙讓」…と列挙してきたら、誰しもフランクリンを思い出すことでしょう。代表的資本主義者として、マックス・ヴェーバーもとくに取りあげているフランクリンは、このような徳目をとくに強調したのですが、それらは、資本主義を担うパーソナリティとして、格別、肝要であるからです。
- (3) 「禁欲的プロテスタンティズム」による「資本主義の精神」は、その^{コロラリー}系（必然の結果）として、右のような諸徳目を生みました。これらの諸徳目を身につけたフランクリンのような人びとが、資本主義をつくり、推進し、完成させたのでした。
- (4) 二宮金次郎こそ、これらの諸徳目の^{ごんげ}権化でした。「資本主義の精神」が人格化したような人物です。二宮金次郎ほど、戦前の日本の義務教育にしばしば出てくる人物はほかにいません。では二位は誰かと言われれば、みんな首をかしげることでしょう。二宮金次郎の銅像はどの小学校にもありましたが、彼以外の銅像となると？ それほどまでに二宮金次郎が理想的人間像だったのです。義務教育の目的は、彼のような人物をつくることにありました。
- (5) では、この二宮金次郎は、どのような人物だったのでしょうか。
- 右の諸徳目からも明白なように、「禁欲的プロセスタンティズム」そのもののような人です。フランクリンがこの人に会ったら、感嘆して、これほどまでの人物が現存したかと、神に感謝するに違いありません。
- (6) 二宮金次郎が「資本主義の精神」そのものであるという理由は、「労働こそが救^{サルヴェーション}済そのものだ」としたことです。「収入を得て生活ができるようになるというのは、いわば労働の副産物であって、労働そのものが目的です。労働さえしていれば、他に宗教的儀礼をしなくても救済される。つまり労働こそが宗教儀礼である。労働のほかに秘^{サクラメント}跡なし。」そこがポイントです。
- (7) このことを二宮金次郎は身をもって示した。そして二宮金次郎を手本にした義務教育で日本の子供たちは育っていったのでした。

2. 本当の学問とは何かを教えた二宮金次郎

- (1) 「節約」「勤勉」のほかに、二宮金次郎が教えたもうひとつの徳目は「好学」でした。銅像にしても何にしても、二宮金次郎はいつも本を読んでいます。学者が調べたところによると、あの本は『大学』なのですが、最低生活もできるかできないかギリギリの労働者が、なんでそんなに難しい本を読む必要があったのでしょうか。なんの必要もないのです。
- (2) 日本に「科挙かきよ(中国で行われた高級官僚登用試験)」はありませんから、どんなに勉強したとて出世するわけではありません。儒教の古典を勉強したという理由で農民が武士にとりたてられたという例もありません。
- (3) 彼にとって「学問をすること自体が目的」だったのです。二宮金次郎が尊敬される所以ゆえんです。受験勉強のためではありません。ここがポイントです。
- (4) 「学問は受験のためにやるのではない、立身出世とも関係ない、学問それ自身が目的なんだ」ということを二宮金次郎は身をもって教えてくれたのです。
- (5) このように、戦前の教育にはしっかりした目的がありました。
- (6) ひとつには、富国強兵。国を富まし国防をしっかりしないと、日本は欧米諸国の奴隷になってしまう。これだけは、どうしても嫌だ。それには、まず不平等条約を改正しなければならない。強い軍隊をつくらなければならない。究極的には、資本主義にならなければならない。そう考えたのでした。
- (7) そのためには、国民形成をしなければならない。つまり、『わたしは日本国民である』との同アイデンティフィケーション一化(identification)がなされなければならないのです。そうしていわゆる「忠告愛国」の思想が、教育の中心となったのでした。
- (8) それにもうひとつ「資本主義教育」。これが、二宮金次郎に凝ぎょうしゆく縮していることは、すでに論じました。
- (9) このように、戦前の日本の義務教育には、ゆるぎなき教育目的があったのです。これが最大のポイントです。教師も父母も、この目的のために教育が行われるのであるということを、はっきり認識していました。このことはさらに最大なポイントです。
それなのに、戦後日本の教育には、目的がみんななくなってしまったのです。

3. アメリカ式教育と正反対の戦後教育

- (1) 「戦後の教育は、アメリカ式教育になってしまった」—これ以上のまっかな嘘はありません。「人種、宗教、習慣、風俗などを異にする人びとを、アメリカという坩堝るつぼに投入して、アメリカ人をつくる。」ここに「アメリカ教育の確固たる目的」があります。そして社会化のための努力は、ここに集中されています。
- (2) 「はじめは、誰とでもコミュニケーションができるようにすること。さらに重大なことは、アメリカ人としての誇りを持たせること。アメリカ史における栄光と名誉とが強調されます。暗黒の部分は教えません。そんなことは、大人になってから知ればいいことです。よい兵士に

なることも教えます。このよきアメリカ合衆国を守りましょう、」と。

(3) 徳目としては、やはり「禁欲的プロテスタント」のそれが中心です。

「自由」と「平等」をも教えます。しかし、なんといっても、何百年の「リベラリズム」と「デモクラシー」の歴史をふまえてのことです。自由、平等の理解は日本とは違います。日本のように、「自由」とはほうらつ放埒のことであり、「平等」とはみんなが同じことをすることだなんて教えはしません。このように考えてくると、戦後日本の教育はアメリカ式教育ではありません。その正反対です。

(4) もし、日本が、アメリカ式教育を行ったとすれば、それは戦前です。二宮金次郎に代表される諸徳目こそ、まさに「禁欲的プロテスタント」の諸徳目です。フランクリンが、とくに強調していることではありませんか。「資本主義の精神」のコロラリー系（必然的に出てくるもの）としての諸徳目ではないでしょうか。

(5) このように、戦前の日本は、アメリカ式教育を行っていたのですが、それを否定したのがアメリカ占領軍でした。ロシア人がレーニン像を引きたおしたように、アメリカ人は、二宮金次郎像を各小学校で引きたおしました。この人を全面否定したのです。それとともに、「節約」「勤勉」「正直」「中庸」「純潔」などの「禁欲的プロテスタント的美徳」も、日本の教育から姿を消しました。行きついた果てが、今の教育です。

(6) その代わりに占領軍は、「日本の過去は罪の歴史である」という歴史観を強制しました。これだけでも、アメリカ式教育とは正反対であることは明白でしょう。

(7) 「歴史こそ民族としての同アイデンティフィケーション一化の根本」である。このことこそ、近代国家がその形成過程においてなした最大の大発見であり、鉄則なのです。歴史を抹殺された国民は、生きようがありません。滅亡あるのみです。

4. 歴史の抹殺によって生じた急性アノミー

(1) 自虐的な歴史教育ほど「父性原理」におけるオーソリティ権威を強く否定するものではありません。「急性アノミーアキュート・アノミー (acute anomie)」が起きて「規範(倫理・道徳)は消え、アナキー無秩序は必然化」します。

(2) 子供が親を殺しそうになるほど家庭内暴力が激化すると、親は子供を医者のところへ連れていきます。

(3) 診察の結果は「異常なし」。脳にも神経にも、身体的にはどこにも病気はありません。精神科の医者も、精神分裂病でも他の精神病でもないし、精神的には全く異常はないと言う。身体的にも精神的にも全く健全なのです。それでも、暴れるわ、暴れるわで、手がつけれられません。そしてついに、子が親を殺すか、親が子を殺すかという結果に……。

(4) 本当の原因は为什么呢。

これこそ、「アノミー(anomie)」なのです。

(5) 「アノミー」とは、「ソリダリテ連帯(solidarite)を失うこと」です。つまり「無連帯」です。アノミーになると、身体的にも精神的にも全く健全な人間が、どんな狂者よりもはるかに狂的に行動す

るようになります。そして、時には自殺します。

- (6) アノミーを発見したのは、社会学の始祖 E・デュルケム(1858～1917年 フランス人)です。彼は自殺を研究しているときにアノミーを発見しました。
- (7) 急に金持ちになるなどして生活が激変することによって起きるアノミーを「**単純アノミー**」といいます。「生活水準が急上昇すれば、それまで付き合っていた人たちとの連帯は断たれるし、上流階級の人たちからは『成り上がり者め!』とさげすまされて付き合いができない。連帯をどこにも見いだせなくて、アノミーになる」のです。
- (8) 「**連帯の喪失**」は、「同一化(identification 自分と同じものだとすること)の喪失」です。「宇宙の中における自分の居場所を失って、絶望的な、このうえない孤独感を味わい、この孤独感から逃れるためならどんなことでもする」ということになるのです。
- (9) 精神にも行動にも致命的打撃を与えますが、病原は社会にあります。いわば社会病です。
- (10) 「**権威オーソリテイの否定によって生ずるアノミー**」を「**急性アノミーアキュート(acute anomie)**」といいます。単純アノミーより激烈なアノミーです。フロイト(1856～1939年、精神分析の創始者)は、「隊長が狼狽したときの兵士」という例を挙げています。「カリスマを持つ指導者や宗教の教祖などが否定されれば、信奉者、信者に急性アノミーが起きて収拾がつかない混乱に陥ります。」
- (11) 「**目的を達成したときにもアノミーが起きることがあります**」「**目的によって同一化していた対象との連帯感がなくなるから**」です。目的を期待以上に達成したときには「急性アノミー」が起きやすいのです。これは、とてつもなく恐ろしい。
- (12) 「**アノミーは、規範を崩壊**」させます。「**無規範状態**」を生みます。だから、「無規範」と訳す人もいますが、そのほかにも、「**アパシー(無気力、無感動、無関心、やる気のなさ)**」も生みますので、無規範よりも意味は広いのです。この「無規範」は、「**規範が消滅する**」という意味です。人が規範を守らないという意味ではありません。だから途方もなく深刻なのです。
- (13) 戦後教育がもたらしたよいものとして、「自由」と「平等」をあげる人がいますが、これはとんでもないウソです。身分社会打破という長い重い歴史の末に得られたものであるがゆえに、「自由」と「平等」とは人類に祝福を与えるのです。そうではなくて、歴史から浮いた「自由」「平等」は、**放埒ほうらつと無秩序**しか与えません。いわんや、急性アノミー下の「自由」「平等」ほどの呪いカースはありません。

P15～23

<コメント>

小室直樹先生による「二宮金次郎論」。「教育の本質」、「先生」の役割と「アノミー」は何かを考えると参考にになります。是非、ご一読ください。

2019年1月25日(金)林明夫